

詩、踊る

CULTURE CITY OF EAST ASIA 2020 KITAKYUSHU "shi odoru" 通信 vol.1

「詩、踊る」と聞いて、ちょっと不思議な気がしないだろうか？
 「言葉を研ぎ澄ます詩」と「言葉によらない表現を追求するダンス」は、ちょっと合わないのでは？
 しかしじつは、詩とダンスにはもともと深い関係があるのだ。
 北九州が誇る三人の詩人と、世界的に活躍する三人の振付家が出会い「詩、踊る」について、紹介していこう！

文：乗越たかお（作家・ヤサぐれ舞踊評論家）Norikoshi Takao

北九州の地で、詩とダンスが出会い。 言葉と身体が、魂で繋がる3つの作品を解説！

「詩は言葉によるダンスであり、ダンスは身体による詩である」

これは現代詩人・野村喜和夫の言葉だ。優れた詩はダンスのように生きるエネルギーに満ちているし、優れたダンスは詩のように豊かなイメージや鋭い視点を観客に伝えることができる。「言葉による芸術」と「言葉によらない芸術」は相反するものではなく、足りない部分を補い合い、互いの表現を何倍にも高めあってくれるものなのだ。

実は今回、北九州が誇る詩人に挑む三人の振付家は「舞踏」という共通点がある。北九州芸術劇場はこれまで世界的な舞踏カンパニー山海塾の世界初演作を上演するなどの実績があるので、観た人も多いだろう。

じつは舞踏の創始者である土方翼も大野一雄も、様々なイメージや動きを作るため、強烈で多彩な言葉を紡ぎだす人だった。それは現代の舞踏へ受け継がれており、今回の三人の身体にも言葉の重要さは染み込んでいるのだ。

まず大駱駝艦で活躍する田村一行は、高橋睦郎の連載詩『深きより 二十七の聲』に挑む。公演タイトルも「深きより」。高橋は現代詩と、短歌や俳句という伝統的な詩は決して隔絶されたものではなく、連綿と受け継がれ繋がっていると考え、自身の作品でも実践してきた。この詩の冒頭にも「hieda no are」つまり『古事記』を伝えた稗田阿礼の名が記されている。そして日本の国造り神話で、生まれたあと棄てられ海に流されたヒルコに自らを重ねるくだりがある。大駱駝艦はグロテスクさをも内包する根源的な生命力あふれる踊りが魅力のカンパニーなので、この邂逅は骨太な作品を生むに違いない。

鈴木ユキオ「HÔKA」は、平出隆の詩『雷滴その放下』。平出は、自分の詩集のデザインを自ら手がけて世界的に評価を受けたりベストセラー小説を書いたりと、多様な才能で様々な領域を横断してきた。本作は、嵐の前の徐々に高まっていく不穏な緊張を通して、いましも雷撃に打たれそうな情景を描き出していく。鈴木ユキオは室伏鴻に舞踏を学び、コンテンポラリーダンスの登竜門トヨタコレオグラフィーアワードを受賞。身体の中にいくつもの相反するベクトルの力を内包し、驚異的なテンションで踊るダンサーである。平出の詩の中にある「招雷針を避雷針にかさね、全身で道程を浄めていけ」という一節は、まさに鈴木と重なるようだ。

今回のプロジェクト「詩、踊る」は～東アジア文化都市2020北九州～の文学事業の一環として行われる。アジア諸国との文化の架け橋に、言葉と身体表現の両面で訴えていく。文学性と身体性、そして歴史性と現代性を兼ね備えたプロジェクトであり、その成果を大いに期待したい。

●
次回より振付家お一人ずつに
作品について
語っていただきます！

11月7日(土)

15:00開演

北九州芸術劇場 中劇場

[料金]

一般 ¥4,000

ユース ¥2,500

(24歳以下・要身分証提示)

高校生[的]チケット ¥1,500

(劇場窓口にて前売限定数のみ・要学生証提示)

*全席指定 *未就学児入場不可

浅井信好的作品タイトルは、宗左近の長編詩と同じ「炎える母」。宗は本作で権威ある藤村記念歴程賞を受賞している。第二次世界大戦中の東京大空襲で母と共に被災し、目の前で母親が炎に焼かれる。主人公(宗)は燃えている母親をあとにして、必死に走って生きながらえる。しかし心に焼き付いた光景、母を見捨てた罪悪感に、長い時を経て向かい合う凄絶な詩だ。浅井は舞踏手として山海塾にも所属していたが、出身はストリートダンスというハイブリッドな世代である。美術や照明・衣裳など様々な角度から作品にアプローチしていく手腕は国内外で高く評価されている。この長編詩にどう挑むのか、実に楽しみである。

「深きより」

詩
高橋睦郎振付・演出、美術・出演
田村一行
(大駱駝艦)

演出
大駱駝艦
(塩谷智司、小田直哉)
坂詰健太、阿蘇尊

「HÔKA」

詩
平出 隆振付・出演
鈴木ユキオ

『雷滴 その放下』

「炎える母」

詩
宗 左近振付・出演
浅井信好

『炎える母』

演出
井田亜彩実

詩、踊る

CULTURE CITY OF EAST ASIA 2020 KITAKYUSHU "shi odoru"

通信 vol.2

世界的な舞踏カンパニー、大駱駝艦で活躍する田村一行は、高橋睦郎の詩『深きより 二十七の聲』に挑む。これは「連載詩」として、古代から現代まで詩歌や文学に関する二十七人の歴史上の人物達と高橋との対話が綴られるものだ。この「冥界との会話」というスタイルと共に鳴し「言靈を鎮める舞踏」を踊るという田村に、どのように挑んでいくかを聞いた。

文:乘越たかお(作家・舞踏評論家) Norikoshi Takao

詩:高橋睦郎 × 振付・演出・美術・出演:田村一行『深きより』

日本文学の歴史を生んだ二十七人の言靈を受け止め、鎮める身体を見よ

—初めてこの詩を読まれた感想はいかがでしたか。

詩に限らず言葉は振付の段階でよく使います。形をなぞっただけの動きではなく、イメージによって実感を伴った動きを生み出すためです。今回のように他人の詩をモチーフに作品を創るのは初めてですが、「詩を前にして何ができるのか」は以前から考えていました。

『深きより』は一話完結で柿本人麻呂・紫式部・世阿弥・近松門左衛門……等、じつに多くの人が出てきます。はじめは各人の人物像が楽しく、とくに随所に現れる「待ち続ける」というイメージが強く残りました。しかし何度も読むうちに、作者の高橋さんが「巫(かんなぎ)」という立場で様々な亡靈達と会話していくという、全体の構造そのものに共鳴するようになりました。舞踏もやはり巫女のようない面がありますからね。

今回のプロジェクトには不思議な機縁を感じています。じつは今年の2月に亡くなった僕の父が英米文学の研究者なのですが、生前に出版した唯一の詩集のタイトルが『深き淵より(『DE PROFUNDIS』デュ・プロフンディス)』。これは旧約聖書の詩篇130「主よ、我、深き淵より汝を呼べり」が由来です。高橋さんに話を伺うと『深きより』というタイトルも同じだとわかり、驚きました。大駱駝艦の公演はもともと何かを鎮めるというような要素がある

→ とは思うのですが、今作は亡くなった父との対話、そして高橋さんの詩が振り起こした数々の冥界の言靈達を鎮める「言靈鎮め」のような作品にできたらと思っています。

—田村さんがチラシに抜き出した詩の一節は、この連載詩の最初の一人、稗田阿礼の章からです。古伝を口伝で伝えてきた自分は、『古事記』が文字で記されたあとヒルコ(最初に生まれた人間だが不完全なため海に流された)のようだとなぞらえたりしています。

これを読んだとき、僕は言葉や振付になる以前のグシャッとしたものが深淵にいるイメージが浮かんだんです。僕も、創作時は作っては棄てるの繰り返しだが、いつも「棄てた方に良いものがあったのでは」と思ってしまう妄執も、「舞踏の深淵」に堆積していると思うので(笑)。形ないものが深淵の中でうごめいていて、それを呼び覚ます、大切な人との追憶みたいなところになっていけばいいのかなど。

—今回出演するダンサーは田村さんを含め男ばかり5人ですね。

はい。登場人物に小野小町や紫式部など魅力的な女性が多いので「男性ばかりの女性群舞」もいつか作りたい、などとたくさんのアイデアが浮かびました。ただ、有名な人々の

→ キャラクターをなぞるだけでは意味がありません。高橋さんが多くの対話の中で研ぎ澄ましてきた「言靈・言の葉」のリアリティを身体に宿して踊りたいと思います。

—高橋さんは作中で、詩歌の発生として「口承書承の発声の一回ごとに新たに生まれ立ち現れる」と古代びとは考えたのではと書かれています。これはコロナ禍の自粛を越えて、今回のプロジェクトが舞台芸術の魅力である「生の身体に触れる一期一会の大切さ」を伝えようとしていることに通じますね。

僕も自粛期間中は不安に駆られることがありました。でも結局、自分は踊るしかないのだと悟ることができた。大駱駻艦の主宰者である麿赤兒は「世界は矛盾に満ちている。その矛盾を引き受けるのは、身体しかない」と言っていますが、高橋さんは同じことを詩でやっているのではないかでしょうか。『深きより』の二十七人は、大いなる歴史の流れに翻弄されながらも書くことを止めなかった人々です。矛盾に満ち、その全てを内包するようなスケール感のある舞踏作品を作るつもりです。

東アジア文化都市2020北九州「詩、踊る」
11月7日(土)15:00開演
北九州芸術劇場 中劇場

極限まで研ぎ澄まされた踊り手の身体はどのようにつくられるのか? 心技体の秘密に迫る!

心

Q. リフレッシュ方法は何ですか?
メモの整理・ノートの整理・手帳の整理・本の整理・資料の整理などを頭をスッキリさせます。

技

Q. 創作で大切にしていることは?
振りとして残らなかった部分や振りとしては現れなかった部分、また踊り手がどんな風景の中でどんなものに動かされているかというような見えない部分を大切にしています。

体

Q. 体づくりの為にやっていることは?
歩行移動、及び野口体操・らくだ体操など。また、現在は日々健康であることが体をつくるための何よりも基本であると考えています。

● 次回は
鈴木ユキオさん
インタビューを
お届けします

詩、踊る

CULTURE CITY OF EAST ASIA 2020 KITAKYUSHU "shi odoru"

通信 vol.3

「詩、踊る」2組目は平出隆『雷滴 その放下』をソロで踊る鈴木ユキオ『HÔKA』だ。小説の執筆など領域を越えて活躍する平出と、室伏鴻に舞踏を学びコンテンポラリーダンスの登竜門トヨタコレオグラフィーアワードを受賞して世界的に活躍する鈴木。自由で強靭な詩と身体が、雷光のように交錯する!

文:乗越たかお(作家・舞踊評論家) Norikoshi Takao

詩:平出 隆 × 振付・出演:鈴木ユキオ 『HÔKA』 強靭な詩と身体の閃光が、いつまでも胸に残り続ける

—この詩は、いましも雷が落ちる一瞬前の鮮明なイメージが連続していますね。どう取り組みますか。

まずは「蛤蠣(かつゆ。ナメクジのこと)」「ウテルス(子宮)」など、知らない言葉を調べることから始めました(笑)。何度も読むうち言葉がリズムとして身体に入ってきて、いまではダンスの世界と平出さんの詩句の世界を往還できるようになってきています。もちろん作者の意図と僕を感じたことにはズレがあるでしょう。でも大切なのは「詩が僕の身体に入った結果、何が生まれるか」なので、僕にとっての『雷滴 その放下』の世界を提示したい。それくらい、振り切っていきたいですね。

—今回はソロダンスですが、詩の中には僕・妻・女庭師などの登場人物が出てきます。

平出さんとお話したとき「アーティストとしての厳しさ」がとても強く伝わってきたんです。だから、僕も自分の身体ひとつでこの作品に立ち向かいたいと思いました。中劇場は結構大きいですが、僕は空間に余白がある方が気持ちよく踊れるので、ソロでも全く問題ありません。

『雷滴』では「黄金の華奢な太腿」など女庭師の繊細でセクシャルな表現や、奥さんの話

▶がスッと入ってきたりしますよね。すごく私的な部分と外の情景が共存している。そして最後には手摺りと手が触れるか触れないか、みたいな究極の肌感覚に全てが凝縮されていく。そういう感覚も伝えていきたいですね。こう見えて僕は華奢なので、女庭師も大丈夫ですよ(笑)。

—鈴木さんのダンスは身体の中に様々なバトルの力を宿しひりぎりで立つ強さが魅力ですが、この詩の世界観との呼応が本当に楽しみですね。作品中、言葉は扱いますか。

ダンスで言葉を使うのは簡単ですが、じつは難しい。「わかったような気分」がダイレクトに来てしまい、観る側の感情や思考がそこで止まってしまうからです。そのため基本的に今日は使いません。ただ断片にした言葉の音声データを加工し、詩句ではなく「響き」として何かを加えるかもしれません。

—全体の構成はどのように考えますか?

じつは『雷滴』は「2行の詩・1行空き・1行の詩」を組み合わせるというルールで書かれているんです。そこで僕も、各シーンにひとつルールを設定して踊ろうと思っています。詩と

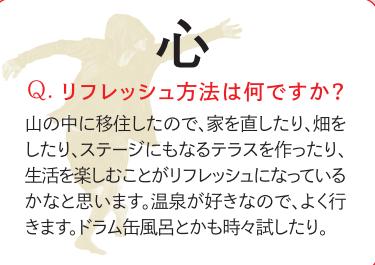
▶ダンスが、内容と形式の両面で関連したら面白いかなと。

そしてこの「形式」は、最近の僕の課題でもあるんです。他のダンサーに振り付けるとき、自分のソロで感覚的にやってきたことを言語化・形式化して伝える必要があります。そのおかげで自分自身の理解が深まっていている実感があるんですよね。とくにコロナの自粛期間中は自分の内側を探る時間がたっぷりありました。

そしていまでは「わからないことをわからないまま精密にコントロールし、他人と共有すること」も大切だと思うようになりました。自分にとって詩とは、まさにそういう存在なんです。わからなくても、身体の中に残り続けていく。そしてあるときパッと像を結び情景が浮かんだりする。じつはダンスも、「各シーンはよくわからないが、全体を見終わったとき、なにかが胸に残る」ことが大切なので、単に詩を動きに置き換えてもしょうがない。ダンスを観た人が原作の詩を手に取りたくなる、「言葉とは何か」ともう一度考えたくなる……そういう力のある舞台にしたいですね。

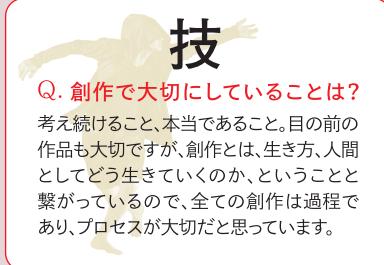
東アジア文化都市2020北九州「詩、踊る」
11月7日(土)15:00開演
北九州芸術劇場 中劇場

極限まで研ぎ澄まされた踊り手の身体はどのようにつくられるのか?心技体の秘密に迫る!



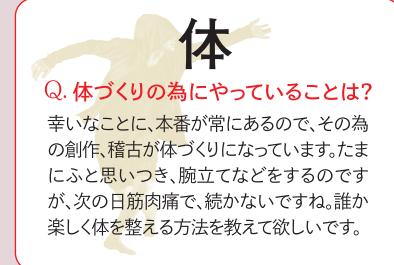
Q. リフレッシュ方法は何ですか?

山の中に移住したので、家を直したり、畑をしたり、ステージにもなるテラスを作ったり、生活を楽しむことがリフレッシュになっているかなと思います。温泉が好きなので、よく行きます。ドラム缶風呂とかも時々試したり。



Q. 創作で大切にしていることは?

考え方続けること、本当であること。目の前の作品も大切ですが、創作とは、生き方、人間としてどう生きていくのか、ということと繋がっているので、全ての創作は過程であり、プロセスが大切だと思っています。



Q. 体づくりの為にやっていることは?

幸いなことに、本番が常にありますので、その為の創作、稽古が体づくりになっています。またふと思いつき、腕立てなどをしますが、次の日筋肉痛で、続かないんですね。誰か楽しく体を整える方法を教えて欲しいです。

● 次回は
浅井信好さん
インタビューを
お届けします

詩、踊る

CULTURE CITY OF EAST ASIA 2020 KITAKYUSHU "shi odoru"

通信 vol.4

権威ある藤村記念歴程賞を受賞した宗左近の長篇詩『炎える母』は、空襲に遭い目の前で母親が焼死するという衝撃の内容だ。そして母を見捨てて逃げた罪悪感に、今度は自分が焼かれ続ける。この重量級の作品を、ストリートダンスから舞踏カンパニー山海塾で活躍後、世界各地で創作を重ねる浅井信好が、いかに受け止め、ダンス作品としていくかを聞いた。

文:乗越たかお(作家・舞踊評論家) Norikoshi Takao

詩:宗 左近 × 振付・出演:浅井信好 『炎える母』 燃える詩、祈る身体 螺旋の中で、また出会うために

一衝撃的な内容の詩ですが、どのように取り組みますか。

僕の創作は「徹底的に研究分析しイメージができるから最後に動きを作る」というスタイルなんです。作品の核を掴んでいない動きは、見栄えが良くても薄っぺらいですからね。そのため詩だけではなく様々な資料を読み込むのですが、特に宗さんの『私の死生観』という本には感銘を受けました。宗さんは母親を亡んだ22年後に『炎える母』(1967)を書きましたが、そこから骨董に出会い縄文土器に傾注し『縄文』(1978)という詩集を出します。それは「母の命を奪った炎によって生み出された美」との出会いでもある。僕は今作を、生命の連環や輪廻といった宗さんの死生観そのものにフォーカスを当てた作品にしたいと思っています。

一浅井さんがチラシで引用されたのは「青い闇が 卷き貝みたいな風となって 赤く舞いあがる」という箇所でしたね。

『炎える母』は、母親が亡くなるところまでは客観的ですが、中盤は過去を振り返ったり罪悪感にさいなまされたりと、かなりカオスな内容なんです。そして最後に再び客観性を取り戻す。とても分析しづらい作品でした(笑)。

▶ ただ最初にこの詩を読んだとき、ピンときたのが色彩感覚なんです。引用したのもそこで、宗さんは青と赤の形容がじつに豊潤なんです。とくに鉛を含んだ沈むような青のイメージが僕の中に湧き上がってくる。虚無と共に母や同級生の死を抱えていた宗さんに色はどう見えていたのかを探っていきたいですね。

また「巻き貝」も重要で、貝がらの中は螺旋構造になっているじゃないですか。僕が數えたところ『炎える母』には「螺旋」という言葉が2回出てきますが、これは宗さんの身に降りかかる様々な事象を昇華するのに重要なワードだったと思うんです。縄文土器にも炎が天に向かって駆け上っていくような螺旋模様が見られ、それは大規模火災時に起こる炎の竜巻「火災旋風」や、母親との生物学的な絆であるDNAの二重螺旋、そして輪廻や回転に繋がっていく。そこで今作では、高さ6メートルの鉄製の螺旋構造を持つオブジェを作り、僕自身も旋回舞踊のように回転する踊りを考えています。

もうひとつ重要なのは、燃えている母を置き去りにして逃げるシーンです。ここで母親と自分は、横に逸れることのできない「炎の一本道」で繋がれていると書かれている。『炎える母』を書くまで、自分を責め続けた22年間はまさに逃げ場所のない一本道のような日々だったはずです。そのことも舞台美術や照明に反映したいと考えています。

▶ 一宗左近という人物の死生観が具現化された舞台美術ですね。言葉は使いますか。

使いません。母の死のシーンはドラマティックですが、ダンス作品は必ずしもストーリーを追うものではないので。出演する僕と井田亜彩実という女性ダンサーも「宗左近と母」ではなく、役割や性別も超えた身体として描きます。燃えるのは僕の方かもしれませんよ(笑)。

一曲や音はどうですか。

『炎える母』からはノイズや重厚な曲を連想しがちです。しかし宗さんの死生観を大局から考えると、違うイメージが浮かんでくるんですよ。過去は変えられない、でも現在の行動で未来は少し良くなるかもしれないという、虚無を越えてたどり着いた原始的な「祈り」のようなものです。ショッキングな母の死や罪悪感だけではない、希望を生み出す力としての「祈り」を伝える作品を創っていきたいですね。

東アジア文化都市2020北九州「詩、踊る」
11月7日(土)15:00開演
北九州芸術劇場 中劇場

極限まで研ぎ澄まされた踊り手の身体はどのようにつくられるのか? 心技体の秘密に迫る!

心

Q. リフレッシュ方法は何ですか?

あまり休むことをしないので、これと言つていですね。しかし、海外公演が多いのでそういう時は街を歩く中で新たなイメージネーションが湧いた時に高揚感を感じます。たぶん、自分にとって、高揚感=リフレッシュなのだと思います。

技

Q. 創作で大切にしていることは?

情報のインプットをとても大切にしています。創作の原点がビジュアルイメージからスタートすることが多いので、ダンスだけではなく、美術や音楽、建築、写真など多くのものに触れるようにしています。

体

Q. 体づくりの為にやっていることは?

基本的には踊りの中で、踊るために筋肉を作るようにしているので、特殊な訓練はしません。しかし、創作している作品に合った筋肉のバランスを毎回調整するので、そのための食事制限とトレーニングは行います。

vol.1~3は
劇場WEBサイトで

